

2016年5月22日

福音書からのメッセージ

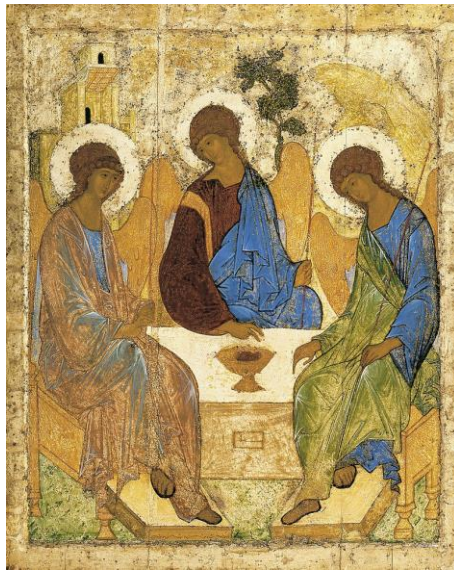
しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。(ヨハネによる福音書16章13節)

今日の箇所はイエス様が間もなく十字架につけられるという中で、弟子たちに語った場面です。弟子たちは「良い羊飼い」であるイエス様に会い、いつまでもイエス様が自分たちのそばにいて導いてくれると思ったことでしょう。そしてその日々がずっと続けばよいと思っていました。

しかし、その日が終わりを告げることをイエス様は伝えます。「あなたがたはわたしをもう見なくなる」、その言葉は、羊である自分たちが再び飼い主のいない状態にされることを意味します。

「こんなはずではなかった」、そう弟子たちは思ったことでしょう。その弟子たちに対し、イエス様は「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない」と言われます。ここで理解すると訳されている語は本来、「担う」という意味を持ちます。したがってイエス様は悲しみに暮れる弟子たちに向かって、「今のあなたたちに、これ以上は言うまい。なぜならあなたたちはこれ以上、担いきれないから」。

今まではいつもイエス様が共にいて、弟子たちの心の重荷もすべて一緒に背負ってくれました。でももうすぐイエス様はいなくなる。だから今は、これ以上言うのは止めておこう。けれどもそこで、イエス様は「しかし」と言われます。イエス様は弟子たちを悲しみの中に置き去りはせずに、真理の霊を送ると約束されたのです。



弟子たちは今まで、イエス様という見える存在にのみ頼って生きてきました。でもこれからはそうではない。聖霊という見えない姿で支えてくれ

る。そしてそのことは、今を生きるわたしたちのためでもあるのです。

もしイエス様が今も肉体をもち、エルサレムという地で活動されていたとしたらどうでしょうか。それはそれで、とてもうれしいことかもしれない。でもわたしたちは、イエス様の声を聞くために遠くまで出かけていき、触れていただくために人ごみをかきわけ、寄り添ってもらうためにとつもない苦労をしなければならなかったかもしれません。

しかし、真理の霊である聖霊は、イエス様が約束された通り、時を超え、地理的な壁もものともせず、確かにわたしたち一人ひとりに与えられています。目には見えません。重さも、感触もない。でも確かに聖霊はわたしたちに注がれています。今も、今このときもわたしたちを支え、導き、守っているのです。

聖霊の働きにすべてを委ねましょう。心を静め、その声に耳を傾けましょう。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>